



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スピノザ哲学と弁証法的唯物論（一）：スピノザ哲学の源泉の問題をめぐって
Author(s)	河西, 章
Citation	北海道大学人文科学論集, 3, 39-63
Issue Date	1964
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34273
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_PR39-63.pdf



スピノザ哲学と弁証法的唯物論 (一)

——スピノザ哲学の源泉の問題をめぐって——

河 西 章

I

今世紀初頭を一つの境としてスピノザ研究の歴史は新たな転期に当面した。前世紀の半ばにその存在を確認せられた、いわゆる『短論文』⁽¹⁾に関する研究の進展は、従来のスピノザ像に対する重大な修正をそのうちに含んでいた。

デルボスの研究に端を発した、この新解釈の基本的方向を一言で表現するならば、スピノザ哲学における機械論的な、幾何学的、分析的な側面をスピノザに於ける非本質的、副次的な契機に引き下げて、スピノザ形而上学の本質をこのようなスタティックな表皮に覆いかくされている、ダイナミックな、『動態論的な』⁽³⁾諸性格、スピノザ哲学のうちの、汎神論と、神性への深い愛、無限なるものへの深い宗教的パトスとに求めようとするものといえることができるであろう。

このような新しいスピノザ像の特徴をスピノザ研究の歴史との関連において見るならば、この像と古典的なスピノザ像との決定的な差異は、スピノザ哲学の源泉としてのデカルト哲学に対する態度のうちに見出される。

古典的スピノザ像の出発点は、同時代人ライプニッツの証言のうちに見出される。⁽⁴⁾ライプニッツによれば、スピノ

ザ哲学の本質は、デカルト説からの展開のうちに、『過激なデカルト説』(un cartésianisme outre)のうちに求められている。ライプニッツをはじめとする、デカルト、スピノザの同時代人たちにとって、デカルト説の決定的な新しき、その真に独創的な部分は、近代自然学に由来する機械論的自然観と、数学的、幾何学的方法とのデカルトによる哲學的保証と、その形而上学への応用に他ならなかったから、デカルト哲学においては、スコラ的存在論の圧力や、キリスト教的要因などのために不徹底な、未完成なままに終らざるをえなかった『普遍数学』(mathesis universalis)の構想の完成と実現をスピノザ哲学のうちに見出して、そこにスピノザ哲学の意義と獨創性を見てゆくということは、この展開を、機械論的唯物論乃至はそれに近い見地から肯定的に眺めるか、或いはライプニッツ自身のように、機械論を克服してゆくという見地から見てゆかという、到達点における差異はあったとしても、少くとも近代自然学とその機械論的自然観の意義を理解した同時代人たちにとっては極めて自然な、かつ代表的なスピノザ観であったということができ得るであろう。

このようなスピノザ観のより整った、より論理的に一貫した形態がヘーゲルとその追隨者たちのスピノザ解釈のうちに見出される。⁽⁵⁾ヘーゲル哲学自体が、その欠きがい源泉としてスピノザの『実体』を持っていたと言えるから、ヘーゲルのうちには、後に述べるように、スピノザの一元論に対する深い共感と、スピノザのうちに潜在する弁証法的諸要因についての深い洞察が発見されるのであるが、少くとも、その『哲学史』において述べられている限りでは、デカルトとスピノザの関連を、大陸合理論の悟性的、形而上学的論理的展開の二つの主要な段階として、後者を前者の立場の『客観化』と『完成』として描き出している点で、本質上ライプニッツと異ならない。クローノー・フィッシュャーやエルドマンらのヘーゲリアンに於いては、より生硬で、非弾力的な、アーティフィシャルな弁証法的論理の枠組がデカルトとスピノザに一方的に押しつけられていて、両者の関連は、二元論から一元論への、論理的に必然的な展開の単なる例証としてしか扱われていないとさえ言いうる程である。⁽⁶⁾

確かに、デカルト哲学の形成に決定的な役割を果たしたものの一つは近代自然学の機械論と数学的方法であつて、ただデカルト説ではこうした科学的、機械論的側面が、一貫して体系を貫徹しえずに、自然を『延長』として規定するという、新しい物体把握にのみ局限せられていたために、『心身問題』をはじめとする体系の破綻をも招かざるをえなかつたのであつた。この破綻は、デカルトがその思索の出発点から保持して、最後まで変ることがなかつたキリスト教的観念のせいだつたというのが、このようなデカルト＝スピノザ観の考え方なのであつて、スピノザがデカルトに残存したこのキリスト教的なもの、デカルト自身の表現によれば『無からの事物（の創造）、自由意志、神人（イエス・キリスト）』と云う『三つの奇蹟』（*Tria mirabilia fecit Dominus: res ex nihilo, liberum arbitrium, homo deum.*⁽⁷⁾）をその体系の中でことごとく否定し去り、とくに人格神の観念を完全に捨てて、『神即自然』（*Deus sive natura*）の汎神論と決定論の立場に立つに至つた点に、スピノザのデカルトからの発展が、また同時にスピノザ哲学のデカルト哲学に対する優越が見出されることになる。それ故、スピノザ形而上学の一見してほとんど全面的なスコラの存在論の論法と用語法への依存の根底に、この機械論の貫徹を見ることが最も重要なことと見なされて、この見地から逆に、スピノザとデカルトの共通性——たとえば、属性化された実体概念⁽⁸⁾や、哲学の究極に倫理的目標を設定し、哲学にあくまで実践的性格を要求してゆこうとする立場など、さらには、*Affectio* 論を中心とする倫理学の具体的論議における、デカルトの『情念論』のそれとの親近性⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾等々——も扱えられるに至つたのであつた。

しかし他方、スピノザのうちにはさきに述べたような、デカルトとはかなり異質の、神秘主義的とさえ言いうるような、深く宗教的なパトスが同時に存在していて、スピノザ哲学を単にデカルト説の整合的一元論的展開とのみ見ることを妨げた。そこで、十八世紀の自由思想家たちの背後には、ほぼ一貫してデカルトとスピノザが存在するというるにも拘らず、十八世紀の目から見れば、スピノザ説には余りにも、神学的、形而上学的色彩が強すぎて、援用するよりもまず批判すべき、扱いにくい無神論——啓蒙の理神論とはかなり異質の——のみがまず強調されざるをえないこ

とになったのである。⁽¹¹⁾ P・ペイルの『歴史的・批判的辞典』⁽¹²⁾のうちに典型的に示されているような、一方ではデカルト哲学を非キリスト教的な方向に徹底しようとしながらも、他方余りに神を絶対化しすぎて、神のうちに『物体』『延長』をもとりこんだがために、かえつて神そのものの否定に至りついたところの背理的な一体系、その清浄で、全てを形而上学的冥想に捧げていた、キリスト教徒の目から見てさえ非難する余地のないほどの全世涯は、あらゆる人々に深い印象を残さずにはおかなかったにも拘らず、その体系は一見して明白な自己矛盾の故にほとんど使いものにならないところの無神論の一変種、別の表現によれば『神に酔える無神論者』の立場というのが、スピノザの数少い支持者たちと数多い反対者たちにはほゞ共通のスピノザ観に他ならなかったのであった。『百科全書』に見られるスピノザとスピノジストについての、そつけないほどの短い敘述のうちに見られるものも、風がわりな無神論というペイル流のスピノザ観の延長に他ならない。フランス啓蒙の主だったものたちが、その思索の少くとも一時期をスピノザ主義者として過したことはよく知られているが、少くとも自覺的には彼等はスピノザの批判者としてしか現れず、彼等が例えばロックに対して持つていたような親近感⁽¹³⁾はスピノザに対しては殆んど見当らない。

それ故、スピノザ説がけみした忘却と誤解の一世紀は、スピノザの汎神論的体系に対する、主としてペイルに起因する、また同時に同時代人たちに共通だったスピノザ像に起源を持つ、端的にネガティブな評価の故であつた。

いわば『死んだ犬』のようにのみ語られて、わずかな知己たちの記憶のうち以外には、永遠の忘却のうちに埋れるかに思われたこの哲学が、忘却の百年の後に、にわかに時代の注目を一身にあつめ、時代を代表する思想家たちから最高の讃辞を捧げられるに至ろうとは、ペイルのみならず他の何人も予想しえないところであつたろう。ドイツ啓蒙による、スピノザ説のこの不死鳥のような蘇えり、スピノザ・ルネッサンスのこのドラマは、哲学の歴史において偉大な体系のみが演じえた、優れた思索のみが有するかの生命力の発現に他ならなかったが、その忘却の一世紀と、それにつづく華やかな復興の一世紀との著しい対照の故に、近世哲学史における最も劇的な場面の一つをなしている。

デカルト哲学の迫力と、ライプニッツ哲学の実り豊かさにおいては一步を譲るところがあるとしても、その高原の大気のような透明さと、その一貫する理性へのゆるぎない信頼の故に、合理論のうちにふさわしい位置を見出していた古いスピノザ像にとつて代る、この復興期のスピノザ像のうちに見出される聖スピノザの新たなイメージにおいては、その神秘主義的側面のみがむしろ過大な照明を浴びる結果となつたのであつた。

もはや『スピノザの哲学のほかに哲学はなく』(レッシング)『神が最もそば近く見られたのは恐らくここから』に他ならず、(ルナン)この『神に酔える人』、(ノヴァーリス)この『放逐されたる、聖スピノザの亡魂に、恭々しく捲き毛を供』うべし(シュライエルマッヘル)とされる、新たなスピノザ観、ドイツ啓蒙によつて代表され、ドイツ観念論のうちにそのこだまを有する、いわば『復興期のスピノザ像』、神性に最も肉迫し、最も深い形で神を表現しえたところの、無限なるものへの神秘的な愛にひたり切つた聖スピノザの優れて宗教的な体系という、この新しいスピノザ像のうちには、同一の体系、同一の思想家について、とうてい両立しえないような、古典的肖像に対する破壊的な修正が見出される。前の世紀が、そこに欠陥と否定面のみを見出したその同じものを、後の世紀は崇敬し、肯定し、無条件に受け入れようとする。復興期のスピノザ像は、神に酔える無神論ではなくて、無神論の言葉で述べられた至高の神学をそこに見る。新しいスピノザ像は、以前のスピノザ像の単なる裏がえしに他ならない。

一旦、このようにスピノザの無神論が、いいかえればその徹底した機械論の側面が、スピノザ体系においては、単に副次的、偶然的な役割しか認められないことになるならば、デカルトからスピノザへという決定的な路線はいまや両哲学を結ぶ非本質的な筋道に引き下げられ、スピノザ哲学の諸源泉中に占めていたデカルト説の決定的地位はもはや承認されないものとなる。

このようなスピノザ哲学に対するデカルト哲学の役割の意識的な相対化、スピノザ説に対するデカルト説の影響力の他の諸源泉との並列化にはじまつて、デカルト説以外の諸契機の強調と重視とに至る第一歩が、フロイデントール、

ドウニン・ボルコウスキー、さらにはデルボスらによつて踏み出された。⁽¹⁵⁾今日のスピノザ解釈の主流をなすこの新しい方向は、いわば旧い二つのスピノザ像がそれぞれ一面的に描き出したスピノザ像を、綜合し、統一して、その二つの一面的スピノザ觀を同じ地盤において比較検討したものである。ということができよう。その結果は、デルボスが明瞭に肯定しているように、デカルト的、幾何学的、機械論的側面の決定的輕視であつた。

II

確かに、このような見解へとわれわれを導きうるいくつかの特徴がスピノザのうちには明瞭に見出される。

そもそも、さきに見たような、スピノザ体系の本質を、機械論的自然觀の徹底としての無神論のうちに見る古典的スピノザ像は、同様に機械論と幾何学的方法のうちにデカルトの獨創性を見る、同じく古典的なデカルト像を前提している⁽¹⁾と見てさしつかえないが、このような前提としてのデカルト像そのものが、ジルソンの画期的ともいえる研究⁽²⁾の結果崩壊してしまつた現在、その論拠の一半をすでに失つてゐるわけであつて、それはいわば誤解されたデカルトの上に、さらに誤解されたるスピノザを重ね合せるという二重の誤りの産物でしかありえないといえるだろう。

従つて少くともラポルト以後の、できうればレヴィスやルフェーヴルらの研究をも考慮に入れながら、この新しいデカルト像にもとづいてデカルト説を位置づけるのでないならば、ただ同時代から引きつがれた誤解を確認しなおすという以上の意味は持ちえないことになる。勿論、ラポルト流の主意主義的デカルト理解をそのまま全面的に肯定することはできないのであつて、そのことはすでに別の機会に論じたのでここでは触れないことにするが、⁽⁴⁾古典的デカルト像がそのままではデカルトの正しい肖像とはみなしえなくなつてゐるという重要な事実と、また、一旦古典的な像が崩壊し去つた直後には、あらゆる種類の代りのイメージが一度に出現してその權利を主張しはじめるという、あらゆる解釈というものにつきまとう一種のたよりなさ、欲するどのようなイメージをも代入しようと思えば代入で

きないことはないというその恣意的性格の認識——デカルト研究の歴史で起った事態と極めて似たものを、古典的スピノザ像の明らさな否定に伴って起りえた事態のうちに想起できるということを、さしあたり指摘しておくことはぜひ必要である。

当面のスピノザ研究においても、古典的スピノザ像が揺ぶられ、次第に崩れ去るとともに、デカルト説の重みに押しひしがれていた他のすべての契機が一斉に自己を主張しはじめ、あたかもあらゆる解釈者が、自らの欲するものをスピノザのうちに見出すことができるかの観を呈するに至つたのである。

スピノザ形而上学におけるスコラ的存在論の決定的影響を強調するフロイデンタールの研究も、スピノザのうちにその若い日の唯物論的、無神論的、自由思想家的思維をのり越えて、『エチカ』に見られるような形の完成にその体系を引つばつて行つた原動力としてのキリスト教的諸契機を強調するように思われるドゥニン・ボルコウスキーの研究も、さらには、スコラの影響を溯つて、アリストテレスのうちにスピノザ説の重要な起源の一つをみとめるウォルフ⁽⁷⁾らの主張についても、また、近世初頭の神秘主義(エックハルト、タウラーなどの⁽⁸⁾)や、さらに溯つて、アレクサンドリアの哲学のうちにスピノザ説の本質を想定するアムラン、ブロッシャール⁽⁹⁾らの考え方にしても、さらに、ルネッサンス自然哲学の汎神論のうちに、就中、ジョルダーノ・ブルーノのうちにスピノザ説の起源を見出すアヴェナリウスの意見⁽¹⁰⁾についてみても、いづれもがスピノザのテクストのうちに相応の根拠を見出しうることは確かであつて、スピノザの蔵書の目録からの抜き書きを一覧しただけでも、それらの主張を無根拠として一概に否定し去ることは、テクストに忠実な所以でもなく、また公平な態度ともいいえないように思われる。このように源泉をあげてゆくならば、むしろ、ベイコンや、とくにガッサンディ、ホッブスらの唯物論的傾向の諸哲学や、エラスムス、トマス・モーア、さらにマキアベル⁽¹¹⁾らのヒューマニストたちの影響⁽¹²⁾はもつと強調されてよい理由があるように思われるし、また、さかのぼつてアヴェエロス⁽¹³⁾にその源泉を求めることも、逆にスピノザのうちに近代唯物論全体の源泉を見出して、マルクス主義

をも一、種、の、スピノザ主義と見なそうとするプレハーノフ、デボーリン流の見解⁽¹⁵⁾すらもが、スピノザの新解釈のうちに同じく市民権を主張することが可能だといふことができるだろう。

この最後の場合については、後にさらに若干の敘述を行なう必要があると思われる特異性をそのうちに認めうるのではあるが、大別して、これらの新解釈は、いわば、自己の主張する源泉をデカルト説と同じレベルに、並行的に列挙しようとするところにその性格があるのであつて、少くともそれらをデカルト説に代えてスピノザ哲学の内核に位置せしめようとする傾向は殆んど見当らない。これらの主張を裏づけるテクストの比重を、デカルト説に結びつくテクストの比重と比較考量してみるならば、そのような逆転の成り立ちえないことは、いかに強引な解釈者も承認せざるをえないからである。

従つて、これらの諸新解釈は、古典的像の補完的修正、デカルト説の意義を割引きし、デカルト説の影響を相対化するといふネガティブな働きにむしろその特徴があるのであつて、それ自身だけで、新しいスピノザ像の再構成を企てうるようなポジティブなものを、それらのうちに見出すことはむずかしい。

ゲープハルトやデルボスの研究が特に抜きんで感ぜられるのはまさにこの点においてであつて、そこには『短論文』に対する研究の成果を踏まえての、スピノザ哲学の内核についての新しい構想の設定と、それに基いての古いスピノザ像の批判的摂取が見出される。ゲープハルトなどの見解の背後には、今世紀のスピノザ研究の中で、量、質ともにとくに際立っている一群のユダヤ系の研究者たち、ヨーエル、デュブノウ、ロビンソンらの研究も存在し、彼らの主張するスピノザ像の土台としては、クレスカス、とくにマイモニデス、さらにはカバラ經典などの、スピノザがその思索の初期をその中で過したユダヤの神秘思想が挙げられる。⁽¹⁶⁾ゲープハルトのように、スピノザのこの神秘主義への傾斜の基礎に、時代が全ての分野の精神的活動に固有の枠として課したパロツクの様式⁽¹⁷⁾の、形而上学における表現形態を想定し、とくに北方パロツクの内在的無限の觀念をスピノザの汎神論の基礎にすえるとともに、同じパロツ

クのフランスにおける現れを、古典主義文学とデカルト形而上学のうちに見、さらに、南方、バロックの超絶的無限の観念の表現をルネッサンスの汎神論哲学のうちに追求して、スピノザ汎神論の側から、逆にデカルトやブルーノらをも包摂しなおそうとする壮大な構想⁽¹⁸⁾に対しては、その可否を論ずるに先だつて、嘆賞の言葉を惜しむことができないが、少くともゲープハルトの主張中のデルボスの主張と一致する部分についていえば、すなわち、『短論文』とくに、その第二対話に見られるような、明らさまの汎神論と、その第一対話に既に明瞭に看取できるデカルト二元論に対するスピノザの不满等⁽²⁰⁾を手掛りとして、この直観的形態で述べられた汎神論的観念をスピノザ形而上学の中核に位置づけるとともに、『エチカ』に見られるような形にこの中核を体系的に展開し敘述するための方法としてのみ、数学的、幾何学的形式を認める構想⁽²¹⁾のみに限つていえば、これを他の諸解釈と同一視することは不適当である。このような形の汎神論をデカルトのうちに見出すことは、ほゞ不可能であるから、これをスピノザ説の中核と見なすということは、スピノザ体系の形成におけるデカルト説の役割を二次的、補助的なものと見なすことに他ならず、デカルト説に最も好意的な見方をとる場合でも、その役割は、スピノザのこの根深い神秘主義的な要因を、修正し、補足し、近代化する⁽²²⁾という役割に限られる。

III

デカルト哲学に対するこのような新たな態度の背後には、合理主義者スピノザというイメージに対する決定的な拒否がひそんでいて、ジルソン以後の、ラポルトに代表される合理主義者デカルトのイメージの拒否⁽¹⁾と、ほゞ軌を一にする方向がそこには見出される。そこにあるものは、デカルト、スピノザに対する忠実な解釈であるよりも、むしろ、現代哲学に顕著に存する非合理主義への愛好に声援せられての、デカルト、スピノザのうちの非合理的側面の強引な発掘の試みのようにさえとれないことはないのだが、他方、その合理論的側面をあくまで両者における本質

的なものと見なしたさきのヘーゲルの把握でも、スピノザのうちの、この合理論的側面によって限定され、近代化され、デカルトと関連づけられるのをまつところの非デカルト的側面の起源が、非ヨーロッパ的、東洋的思惟のうちに求められていて、少くともスピノザにおける非合理主義的、宗教的側面は、それに認められる比重は異なっている。も決して否定されることはなかったのである。

それ故、後年のスピノザがそれらに対して決定的な批判を持ちつづけ、その故に、そこからの追放さえもが彼の上にふりかかっていたところの、ユダヤ教的諸側面が、スピノザ体系の形成に、意外に多くの影響を持っていたことが強調されるに至ったとしても、それは必ずしも全く新しい発見ということではできなかったのである。むしろ、当時のオランダに存した、はげしい神学的、宗教的論争を想起するならば、この時代の生きた宗教的問題にスピノザが全く無関心でありえたと考える方がむしろ不自然というほかはない。そして、その無神論的な、聖書批判的な、自由思想家的な傾向への支持者たちからなる一群の友人たちのグループの他に、下層聖職からなる一団のキリスト教の異端のグループが、当時スピノザ説の支持者として存在しえたということは、すでに、スピノザ説が、生きた思想的状況のうちに持っていた宗教的活力を証するものであったといえよう。

このような観点から、更めてスピノザ自身の証言にもとづいて、そのデカルトとの関係の再吟味を行なってみるならば、意外に薄い両者の関係にむしろ驚くほどである。

さきに指摘した『短論文』の諸性格は一応考慮の外におくとしても、たとえば、スピノザ説のデカルト的起源の有力な目じるしと思われた『デカルト哲学原理』についてみても、それは、スピノザが同宿の若い学徒のために要約した、当時の代表的形而上学としてのデカルト説とスコラ存在論とのレジメと見なすべきことが今日では明らかとなっており、さらにはその主著『エチカ』におけるデカルトへの明白な論及についても、その第一部における神の存在証明に関するテキストにも、また第五部序言のテキストにも、極めて素気ない突きはなした批判のみが述べられてい

るのを見出すのであって、むしろ、その第三部における批判⁽⁶⁾とか、さらに書簡集の劈頭に見うけられる、オルデンブルグ宛の書簡第二におけるデカルトの誤謬論への不満の叙述などの中に、スピノザのデカルト説に対する必ずしも明瞭でない好意のようなものを読みとりたい衝動すら感ずるほどである。⁽⁷⁾

それ故、スピノザ自身の証言だけから見る限り、そのデカルトに対する関係は、一見つき離れた、批評的叙述に終始しているかのように見えるのであって、ライプニッツのような慧眼で、かつ、デカルト形而上学の諸叙述に精通した読者以外には、デカルト説との古典的とまでなつた血縁関係は、むしろ読みとることの困難な事柄であつたとさえいいうるのである。デカルト説とスピノザ説との関係は、いわばその当初から解釈の問題に他ならなかつたのであって、そこにあらゆるスピノザ研究が、おおむねこの源泉の問題から、いかえればスピノザ説におけるデカルト哲学の影響の比重の測定から、自己のスピノザ観を展開せざるをえなかつた必然性が存在した。それ故、スピノザ説の源泉についての見解が、今日一見流動的な状態⁽⁸⁾におかれるに至つたのは、むしろ研究の発展とスピノザ理解の深化、多面化の結果と見ることもできるわけであつて、単なる混乱とのみ見るのは必ずしも適當ではない。

この意味では、合理論者デカルトというイメージを破壊したラポルトらの解釈の場合にも言えることであるが、デカルトとスピノザの思惟の核心をなすものは、近代自然学に由来する、単に機械論的、数学的な立場をはみ出して、両者の体系の合理的整合性を破壊する、体系の破れ目となつてゐる部分にこそ、むしろ見出されることが認められてよいのではなからうか。⁽⁹⁾

『方法的懷疑』から『コギト』に至る、デカルト形而上学の頂点を形成すると見なしうる展開のうちには、近代自然学に由来するものよりも、むしろそれを支え、保証するところの實在への独創的な肉迫が存在し、この直観によって逆に物体が『延長』として、一面的に機械論的に規定されることが可能となるとともに、⁽¹⁰⁾それを単なる機械的唯物論に止らせない弁証法的な諸契機⁽¹¹⁾がそこに確立されることができたのであって、コギトのうちには、単なる機械論の

狭い枠のうちに止ることを拒否し、この枠から抜け出して、實在そのものに迫ろうとするデカルトの苦斗の跡がある。この苦斗の故にデカルトは近世初頭の思想家中で一步抜きん出た存在となりえたのであつて、この苦斗の支えをデカルトがどこに見出していたかということは、いいかえれば、デカルト説において近代自然学に比肩しうるような他の源泉が何に求められうるかはここでは問わないとしても、⁽¹²⁾ 少くとも、そこにデカルト説の本質的獨創性があつたということは認めざるをえないもののように思われる。

自然の外に、自然と対立する他の実体としての精神のうちにのみ定立されえた、この非機械論的なもの、弁証法的なもの、不完全な把握に関しては、デカルト自身が前後撞着する支離滅裂な説明しか与えなかつたのであつて、この契機（ラポルト流に言えば、デカルトにおける主義、義的側面）には、大別して三つの方向の説明をとり出しうるような多義的な敘述がデカルトのうちに見出される。しかし、コギトのうちには、主観主義的な、意識内在的な立場の第一歩と認めうるような側面がまず第一に指摘されうるのであつて、⁽¹³⁾ 実体としての『精神』は、属性としての『思惟』を離れては何ものでもありえないが、この『思惟』はデカルトにおいてはさしあたりまず主観的意識に他ならない。かかるコギトの主観主義的把握にもとづいて、デカルト形而上学全体をこの認識論的側面と、これを歪め、中世的秩序に引き戻そうとするスコラ存在論的側面との相剋と見なすことは、いわば公認の解釈とすらなつて⁽¹⁴⁾ いる。この意識内在的な、主観主義的なデカルト理解から見れば、スピノザにおける主観的意識の輕視と、スピノザ全体を貫ぬく客観主義的傾向のうちには、何よりもデカルト哲学が持つていた近代性の破壊と中世哲学への再顛落という方向のみがまず見出されることになるのであるが、⁽¹⁵⁾ デカルトのコギトをめぐる論議のうちには、単なる主観主義的理解に終りえない、『意識一般』の客観性にまで迫つてゐるような側面も同時に見出されうるのであつて、明証性の規則（*règle d'évidence*）を中心に、本有觀念（*idea innata*）の説や、『最も完全なるもの』としての、従つてまた『最も實在的なもの』としての、また『誠実で瞞さえないもの』としての神という新しい觀念などの補助を受けながら、単なる自己意識の確実性以上

のものをそこに浮び上がらせようというデカルトの努力もまた見落すことができないのである。このような観点に基づくことよつてのみ、デカルトによる数学的、幾何学的方法の哲学的保証のうちに、自らの批判的觀念論に通ずるような、カント主義的、乃至は新カント主義的な側面を見出して、そこにデカルトからスピノザに至る主要な筋道を見ようとしたブランシュヴィック流の解釈は、デカルトの主観主義的、近代的本質と、スピノザの客観主義的、汎神論的、非近代的本質との断絶という、デルボス、リヴォーをはじめとするスピノザとデカルトとの切り離しの潮流にひとり抗して、デカルトとスピノザの結合をあくまで保持しようとする立場を維持することができたのであつた。

スピノザが、その『短論文』における出発点以来、一貫して明証的直観への信頼を失わず、かつ觀念の客観性の把握に絶えず努めていたことは、彼の著作の多くのテキストがそれを証明している。それ故、この共通性のうちにいわば批判主義的立場のひな型を見出して、そこにデカルトとスピノザの親近性を見ようとしたブランシュヴィックの研究は、古典的スピノザ像の崩壊の後もただ一つ生き残つてデカルト、スピノザの連続性の説得力ある証言を提供することができたのではあつたのだが、カント哲学を通過した現代において、カントのうちに批判的に摂取せられたものの萌芽をこれらの体系のうちに溯つて発見し、カントによる合理論の批判的克服を、単に、別の表現で確認するにすぎないようなこの解釈のうちには、カント哲学の成果への安易な依存が見出されるのであつて、むしろ、先行するもののうちに、後の成果を産出するような能産的な力を見出すことこそが重要といわねばならない。この意味では、カント哲学乃至カント主義的路線の原動力は経験論、とくにヒューム主義のうちに見出されるべきであつて、スピノザ説の能産性は、ヘーゲル哲学との関係においてこそ最も明瞭に認めうる。

従つて、スピノザ説をデカルト説とあくまで結びつけて見てゆくということは、それらに対する一切の非合理主義的、乃至半非合理主義的理解をしりぞけてゆくという点から見れば、非常に重要な意義を有するものであるとしても、両者に共通の路線のうちに、ヘーゲル哲学の先駆思想が、いいかえれば、未完成の弁証法的な側面が、それらを悟性

的、形而上学上に安住することを許さなかった理性、的なものへの模索の試みが認められるのでないならば、十分な理解、その真に能産的な側面の理解ということはできないであろう。

スピノザ説とわれわれとの間にはヘーゲル哲学が介在するのであって、この意味では、ヘーゲル体系の三要素の一つをスピノザの『実体』のうちに見出して、これを『人間から切り離されて、形而上学的に改作された自然』に他ならないと規定するとともに、これとフィヒテ流の自己意識の原理との統一としてのヘーゲルの絶対精神のうちに、フオイエルバッハの人間学に近い意味での『現実の人間、現実の人類』を見ようとした、『神聖家族』のマルクスは、他の解釈者よりも一步進んでいるということができるのである。また、『精神現象学』における『実体』の原理の評価を頂点として、スピノザの汎神論のうちに、無世界論 (Akosmismus) を、全ての有限な存在を貫く絶対的否定性の洞察を発見し、『規定は否定である』 (determinatio negatio est) というスピノザの基本的命題の一つのうちに弁証法的思惟の萌芽を見出して、スピノザのうちの悟性的形而上学の枠をはみ出る一切のものに、より高い理性的なものへの過渡的思考という形式を承認しているように見えるヘーゲルのスピノザ理解⁽¹⁹⁾のうちには、確かに、スピノザ哲学の能産的側面への最良の手掛りが見出される。

しかし、『神聖家族』のマルクスは、全体としてなお、フオイエルバッハへの傾倒のうちにあつたのであって、そのスピノザ観は『神学の立場における神学の否定』という、フオイエルバッハ流のスピノザ理解の下にある。⁽²⁰⁾

この意味では、むしろエンゲルスの『反デューリング論』における把握の方がより示唆に富んでいる。⁽²¹⁾ エンゲルスの短い敘述のうちに、われわれが今まで述べて来たような考察をいわば投げ入れて、エンゲルスの敘述を補いながらその主張を要約するならば、そこには、デカルトがそのコギトでの高まりを通じて、機械論的、自然の外に、物体から分離せられた『精神』という実体のうちにのみ定立しえたところの、機械論的な枠をはみ出した、實在そのものへの弁証法的でさえある洞察を、再び、自然、そのもののうちに投入しなおして、かくして弁証法的な自然観への決定的な

一步を踏み出した点にこそ、スピノザ哲学における真に意義ある側面が見出されることになるのである。

それ故、スピノザ哲学の客観主義的側面のうちに、デカルトの主観主義に対する批判と克服を見出すか、乃至は、その見解の単なる裏がえしとして、デカルトにおいて精神の外に、自然のうちにのみ確立せられていた機械論的唯物論の、全存在に対する一元論的貫徹のみを強調することが重要なのではなく、デカルトにおいて思惟のうちにのみ認められていた能働性と自発性のフアクターを、全自然のうちに定立するという意味での客観化の側面を十分に評価することの方が必要なのである。

そして、デカルト解釈の歴史において、ラポルト以後、デカルト哲学の中核に置かれるようになったところの、デカルト哲学の中の、単なる合理論的、悟性的形而上学の枠をはみ出している要因を、ラポルトにならって、自由の觀念と認めることが許されるとするならば、スピノザのデカルトからの本質的な発展は、この自由の觀念の合理化と客観化の試みのうちに、自由とは必然の洞察に他ならないとする、弁証法的な自由の觀念のうちに見出されることになるであらう。⁽²³⁾

さらに、この勝れて近代的なテーマの、伝統的、スコラ神学的表現が、意志と悟性との関係の問題に他ならず、スコラの用語法の枠にお拘束されながら、デカルトがその形而上学において最も展開に苦心して、なお、成功しえなかったものが、唯名論による問題提起以来一貫してスコラ内部の基本的問題でありつづけたこの古典的テーマであったのである。スピノザが、まさにその出発点において明白に不満を表明し、また『短論文』以来一貫して問題視し、かつ批判しつづけたのがデカルトの意志に対する考え方であったことを想起するならば、この問題に対する、伝統的形而上学の枠内でのスピノザの論議を通じて、スピノザが一貫して、デカルトの意志と悟性との分離に反対し、意志の合理化と客観化に努めていることを看取することができるであらう。ここにいわば時代の生きた問題の一つが存していたのであって、この問題への解答を通じて、デカルトとスピノザは当時の哲学界における生きた論争に参加したの

であった。

それ故、さらに言えば、スピノザの客観主義のうちに、単に機械論的唯物論のデカルトからの拡大と展開のみを見るのでは明らかに不十分なのであって、そこに、時代の諸条件によって制約せられた弁証法的唯物論の萌芽を見ることこそが重要となってくる。スピノザのうちに単なる無神論の一変種のみを見出したり、また、そこに機械論の一元論的貫徹しか見出しえない解釈は、スピノザに於ける合理論的側面の擁護に役に立ちうることは否定しえないとしても、デルボス流のダイナミックな、観念論的解釈に対しては、古典的スピノザ像とはば同じだけの論拠でしか立ち向うことができないであろう。スピノザ説の観念論的把握の単なるアンチテーゼに止まるこの機械論的解釈が、今日そのままで維持しえない本質的欠陥を含んでいることは、すでに前述してきたところからも明らかであるといえよう。

それ自身がフォイエルバッハ主義を克服しきれなかった『神聖家族』のマルクスにはじまって、デボーリンのうちにその拡大された映像が見出される、この古典的スピノザ像への唯物論的立場に立つ解釈者たちの固執の背後には、マルクス主義の現代唯物論とスピノザの唯物論そのものとは対しての、いわば二重の錯覚があるように思われる。すなわち、マルクス主義をスピノザ主義の一種に他ならないと見たデボーリン流の見解には、両者を結合する共通の項としてフォイエルバッハが存在し、一方マルクスそのものをフォイエルバッハに還元するという操作と、他方、ヘーゲルの神学的体系のうちに、顛倒された唯物論としての汎神論の本質を見て、ヘーゲル哲学をシェリングの自然哲学に、シェリングをスピノザに還元するという操作とを媒介として、スピノザのうちにフォイエルバッハ唯物論の原初的形態を発見するという二重、三重の錯覚がその基礎に存している。

マルクスによる史的唯物論の確立が、まさにフォイエルバッハに対する決定的批判によってその第一歩を踏み出していることは、『フォイエルバッハに関するテーゼ』の諸章が否定しえないほど明瞭に物語っていると言いうことができないであろうか。そして、フォイエルバッハがその『哲学史』において、一八三三年に描き出したスピノザ像と比

較して、唯物論者となつた彼が一八四七年に附け加えた一連の訂正と補足とに見られる見解は、前者の、スピノザの
 マールブランシュ的側面への、従つて、その唯心論的、観念論的側面への著しい共感と、後者の、同じ側面への明白
 な批判と共感の欠除とを想起するとき、唯物論者、フォイエルバッハの、スピノザに対する距離感を示しているものと
 見ることはできないであらうか。

デボーリンの或る意味ではオリジナルな解釈のうちから、単に、マルクス主義をスピノザ主義の一種と見なすとい
 う表現のみを取り除いて、他の点では、殆んどデボーリンの論文の趣旨を再生産していると言つてさしつかえない、
 『ソウイェト・アカデミー版世界哲学史』の解釈も、そこには若干の洞察のあることは認めねばならないが、少くも
 スピノザ把握の根本的志向において、すでに述べて来た欠陥を共にしていると言えるであらう。スピノザの『実
 体』のうちに『自然および物質に対する人間の認識の發展過程における一つの重要な段階』を認め、スピノザのうち
 に、ヘーゲルを介して現代の弁証法的唯物論に至る展開の主要な一步を確認し、そこに単なる自己意識と主体性の原
 理へのアンチテーゼを見出すだけでなく、デカルトにおいて局限された形で樹てられた、自由と能働性と主体性の原
 理の、より客観化され、より拡大され、より理性化された形態を見るときにのみ、スピノザ哲学と大陸合理論全体の
 非合理主義的、観念論的解釈を拒けることが可能となるだらう。

註

I.

- (1) 正確には、失われたラテン語の原著のオランダ語訳の写本“Korte Verhandelng von God, de Mensch en deszelfs Welstand”.
 この短い写本の諸性格は、『知性改善論』から『エチカ』へという、従来のスピノザ形而上学の基本線を大きく修正するものを含んで
 いて、とくに、その第一部第二章『神とは何か』における二つの対話にもりこまれている汎神論と、デカルトに対する批判は研究者

たちの注目をあつめることとなった。ここでは、その諸性格の詳細な分析にも、また『短論文』がスピノザ説中で占めるべき位置などについて触れることができないが、そのあたりに L. Robinson; *Kommentar zu Spinozas Ethik*, 1928, 1er Bd, Einleitung, s.s. 5-29, Pléiade 版 *Oeuvres complètes de Spinoza*, p.p. 59-70, Notice du Court Traité, せよび、皇中訳、岩波文庫版『短論文』冒頭の解説などを挙げておく。主要なスピノザ研究で『短論文』に言及しなうものは殆んどなる。

- (2) Victor Delbos; *Le spinozisme, Cours professé à la Sorbonne en 1912-13*, 3e éd. 1950. 他の研究との関連をいえば、デルボスの特徴の一つは Conatus の重視であるが、その Appendice, I における『短論文』の性格の捉え方や、同 II における、デカルト説の位置づけは、その後の研究に強い影響を及ぼして、スピノザの新解釈の出発点となったと言つてよい。桂、『スピノザの哲学』1956, 第一章、とくに二〇頁をも参照。

- (3) 桂、同著、一八一九頁。

- (4) Leibniz; *Lettre à Nicaise*, fév. 1697, cf. A. Rivaud; *Histoire de la philos.*, t. III, p. 323, Delbos; loc. cit.

- (5) Hegel; *Sämtliche Werke, Glockner 版* Bd. 19, 2^{te} s.s. 372-7, K. Fischer; *Gesch. d. n. Philos.* Bd. II, p. 87, p. 224 etc., Erdmann; *Versuch einer wissenschaftlichen Darstellung d. Gesch. d. Ph.*, Bd. II, s.s. 59-63, せよび真訳、フオイエルバッハ『近世哲学史』下巻、河出文庫版一七三頁、哲学雑誌、一九五四、第二号、桂『近世における実体と主体』九五頁以下など参照。

- (6) Delbos; op. cit. p. 210.

- (7) *Cogitationes Privatae, Oeuvres de Descartes, A.T. t. X*, p. 218. 桂、前掲書、第一章の一。せよび Robinson; loc. cit. S. 32. デカルトが、この初期の表現と全く同じ内容のまま、神の創造や、自由意志などを承認していたと見ることは問題であるが、スピノザのデカルトとの差異を浮び上がらせる手段として、これらの観念を使用する限りではとくに問題はないだろう。デカルトの自由論の中にはもっとさまざまな側の面をみとめうるのであって、そのことはデカルト説の解釈においては重要な意味をもつてくる。これらの点については、拙稿『デカルトにおける人間の自由について』北大、文学部紀要 1956、Laporte; *La liberté selon Descartes, Revue philos.* 1936, など参照。リボーはその『哲学史』で、はつきり『スピノザはクリスチャンではなかった』と述べている。Rivaud; op. cit. p. 311.

- (8) 桂、前掲書、第一章の四、四三頁以下など。なお、スピノザの実体概念は、少くともその用語法などから見るかぎりスコラ存在論の規定そのままといふことができるが、そこに、より近代的な Heereboord などからの影響を強調する有力な主張のあることを附言する。Robinson; op. cit. s. 32, Rivaud; op. cit. p. 323, Dunin-Borkowski; op. cit. Lachize-Rey; *Les origines cartésiennes du Dieu de Sp.*, Conclusion, p.p. 262-5, など、『ヤニス』誌、前記特輯号、竹内良知論文『デカルトとスピノザ』七九頁以下参照。
- (9) Descartes, *Principe de la philos. Préface* における諸学の位置づけでは、倫理学が諸学の最上位に置かれてゐるし、また、Discours のとくに第六部に見られるような智識の実践的性格の強調が、スピノザのうちにも見出されることは重要で、同様に、

Ethica という形でその形而上学を展開したゲーリンクスの場合にもみとめられるように、そこにデカルト的構想のスピノザにおける反響をみる事ができる。桂『西洋近世哲学史』(一)第五章「一、および二」。

- (10) スピノザの倫理学をこの観点から見ると、その第三部を中心とする論議は、デカルトの情念論における論議のいわばスピノザ的展開であって、松果腺の仮説を中心とする機械論的生理学への批判と、それに代る Conatus 説の強調や、個々の情念—*affectio*—についての細かい差異はあるとしても、情念についての論議を倫理学の中心におき、情念による情念の制御の途の探究に、『幸福な生活』への有効な手段を見出そうとする基本観点などはデカルトの立場をほぼうけついでいるといえるのであって、デカルトのモラルの本質を *moral provisoire* のうちに見ようとするのではない限り、デカルト説とスピノザ説の最大の親近性は、このような道徳思想における共通性にあるように思われる。Wolfson; *The Philos. of Sp.* 1934, vol. II, p.p. 187-8.

- (11) K. Marx; *Heilige Familie*, s. 297, マルクスは十八世紀啓蒙とフランス唯物論は、単に現存の政治制度に対する闘争であったのみでなくて、『デカルト・マルブランシュ、スピノザ、ライプニッツらの十七世紀の形而上学に反対する公然たる闘争であった』と規定する。

スピノザの自由思想家との関係については P. Vernière; *Spinoza et la pensée française avant la Révolution*, tome I, p. 12, tome II, chap. III, IV. G. L. Kline. *Sp. in Soviet Philosophy* 所収 G. Akselrod; *Sp. and Materialism*, p.p. 77-86, p. 88, ではスピノザ唯物論と十八世紀唯物論とのつながりが強調されている。

- (12) P. Bayle; *Dictionnaire historique et critique*, 1697, t. 3e, p. 610. 十八世紀の啓蒙家たちに決定的な影響を持ったといわれるベイルのスピノザ観は、全体として見れば極めてネガティブな評価で貫かれていて、結局スピノザのうちにはエピクロス流の無神論の要素と、それとは全く異質の要素とが自家撞着的に混合されており、その最大の混乱は、延長を神乃至実体の属性として認めた点に求められている。そして、その無神論的傾向と矛盾して、その生活は最もキリスト教的、宗教的色彩で貫かれているというのがベイルのスピノザ像の中心となっている。ベイルのこのスピノザの実体観の批判は、ベイルが伝統的スコラの存在論を抜け出しえなかったところから生じたのだというのが、ブランシュヴィックの意見である。L. Brunschvicg; *Spinoza et ses Contemporains*, p. 178. スピノザがこの点に充分自覚的であったことは書簡第六「Oldenburg 宛のうちはつきり示されている」Ethica II, prop. 6, および I, prop. 15, schol. にも参照。

- (13) *Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, tome 31, p. 656, 及び桑原編『フランス百科全書の研究』第一章「一、および三」とくに、八三—九頁。

内容のみならず、その表現まで全面的にベイルの辞典に依拠し、かつ、極めて省略された *Encyclopédie* のスピノザに関する敘述は、それが Locke に割いた四頁にわたる、また、*cartésianisme* の項に当たった一九頁に及ぶ詳細な敘述と比較するとき、百科全書家たちが、スピノザ哲学にくいこんだ形而上学的性格をいかに扱いかねたかがよく分る。*Encyclopédie*, t. 5, p.p. 409-427, t. 20, p.p.

226-229, cf.

- (14) 豊川 龍、ゲーテヘルト『スピノザ概説』創元社哲学叢書、及び桂、前掲書、第一章の二。E. Boutroux; La philos. allemande au XVII^e siècle, cours professé à la Sorbonne en 1887-88. のうちには『自然主義者スピノザ』と『神秘主義者スピノザ』との最初の衝突の一例が見出される。Chap. IV, p.p. 39-.
- (15) J. Freudenthal; Spinoza, sein Leben u. seine Lehre, 1904, s.s. 32- (III^{es} Kapitel), s.s. 309- (XII^{es} Kapitel) etc. Dunin-Borkowski; Der junge De Spinoza, 1910, V^{es} Kapitel, I. s.s. 460-, s.s. 442 etc. および I^{es} Kap. Delbos; op. cit. Appendice II. および 1^{ère} Leçon, p.p. 10-11, Conclusion, p. 172 etc. Rivaud; op. cit. tome III, p. 327.

II.

- (1) 『古典的デカルト像』とその崩壊については、H. Lefèbvre; Descartes, Introduction および、前掲拙稿参照。
- (2) E. Gilson; Le rôle de la pensée médiévale dans la formation du système cartésien. 1928, および La liberté chez Descartes et la théologie.
- (3) J. Laporte; Le rationalisme de Descartes, G. Lewis; L'individualité selon Descartes, R. Lefèbvre; La vocation de Descartes, Le criticisme de Descartes, etc. および『サンス』誌、第六冊、デカルト特輯号における野田論文『デカルトにおける形而上学と自然学』一五頁以下。
- (4) 前掲、拙稿および、H. Lefèbvre; op. cit.
- (5) Freudenthal; op. cit. および Spinoza u. d. Scholastik.
- (6) 前節註(4)、および(7)参照。
- (7) H. A. Wolfson; op. cit. vol. I, p. 19. はスピノザ哲学全体の形成に与った三人の思想家として、マイモニデス、デカルト、アリストテレスを挙げている。従って、スピノザの源泉は、その比重においては、むしろ、論理的、科学的なものにおかれていると見てよい。p. 47 cf.
- (8) ゲーテヘルト、前掲訳書、ここでは、スピノザとコロンギアント派との接觸が重要な意味を与えられることになる。cf. Rivaud, op. cit. p. 326. ("naturalisme religieux" とスピノザの『スピノザ概説』。同じく、p. 263-4.
- (9) Rivaud, op. cit. p. 325, Dellos; op. cit. p. 11. V. Brochard; Le Dieu de Sp. (Etudes de philos. ancienne et moderne) cf.
- (10) Avenarius; Über d. beiden ersten Phasen des spinozischen Pantheismus u. d. Verhältnis d. zweiten zur dritten Phase,

1868.

Ch. Sigwart; Spinozas neuentdeckter Traktat etc. 1866. 桂、前掲書第一章の三三六頁以下。

- (11) Rivaud; op. cit. p. 326 によれば、一六一冊からなるスピノザの蔵書中には、トマスの辞典。アウグスティヌスの書物のレジューメ、マイモニデス『迷えるものの指導者』、カルヴァンの『インスティテューティオ』、マキアベリリの著作、トマス・モーアの『ユートピア』、デカルトの著作八冊、バイコン、ボッブスの著書などが含まれている。

- (12) デカルトの『省察』に附せられた、ガッサンディとホッブスの、おのおの第五、第三反駁とデカルトの答弁、竹内良知氏前掲論文、第三節。ガッサンディについてはその反駁中での実体についての扱え方などが影響を持ったであろうことが想像されうる。ホッブスについては、主として政治哲学における影響を認めうるが、スピノザで重要な Conatus の概念もホッブスに由来するのであって、形而上学についてもその影響を想定することは決して不自然ではない。(Rivaud; op. cit. p. 299 cf.) バイコンについては前掲、オルデンブルグ宛書簡では極めて軽くしか評価されていない。(Wolfson; op. cit. vol. II, p. 43, 136 etc. cf.)

- (13) 『短論文』、第二対話の主体の一人にはエラスムスなる名が与えられている。そのエラスムスは、神秘主義的なテオフィルスなる主人公から見ればむしろ従属的な役割しか果たしていないように見受けられるが、これを単なる名前の借用のみとみるか、さらに内容上の関連を想定すべきかはにわかに決定しがたい。スピノザとヒュ머니ストたちとの関係は今後の問題として置きたい。ゲーンハルト前掲訳書、第三章とくに五七頁以下をも参照。

- (14) Rivaud; op. cit. p. 325 etc. Wolfson; op. cit. vol. I, p. 30, 125, 235 etc.

- (15) 永田訳、テボーリン『唯物論史』、昭和4年、十六～十七頁等。G. L. Kline; Sp. in Soviet Philosophy, 1952, Lodon, Introduction, および、同著所収の Akselrod; Sp. and materialism, p.p. 61, なお「上記に所収のテボーリンの『スピノザの世界観』という論文もここに収められている。テボーリン流の『スピノザ主義とマルクス主義との親近性の強調への批判については、同所収』 Luppol; The Historical Significance of Sp's Ph. p. 176, cf.

- (16) 豊川訳、ゲーンハルト前掲書、第二章、Rivaud; op. cit. p. 323. なお、デルボスは必ずしもユダヤ教の影響を決定的と見てゐるわけではない。op. cit. p. 213, etc.

- (17) 豊川訳、前掲書、第五章。

- (18) スピノザのこの内在性 (Immanenz) の重視については、Th. Camerer; Die Lehre Spinozas, 1914, Ies Kap. 44-45 Ethica, I, prop. 18, 44-45 『短論文』第二対話参照。

- (19) C. Gebhardt; Spinoza, Vier Reden, "La dialectique intérieure du spinozisme" (1927) p.p. 2-30; "Spinoza/Judentum u. Barock" (1927) p.p. 33-53.

- (20) Delbos; op. cit. p. 212, cf. IIe, et IIIe Leçon.

- (21) Delbos; *ibid.* p.p. 10-11.
(22) 桂 前掲書、第一章の三十三頁。Lachize-Rey; *op. cit.* Conclusion cf.

III.

- (1) J. Laporte; *Le rationalisme de Descartes, Conclusion*, 著者 F. Alquié; *La découverte métaphysique de l'homme chez Descartes, Conclusion*. など。
- (2) スピノザとユダヤ教的側面との分離を強調するものに、たとえば Kline, *op. cit.* 所収 Rakman; *Sp. and Judaism*, p. 60. スピノザのユダヤ教に対する批判の質と事情について、Rivaud; *op. cit.* p.p. 264-273.
- (3) スピノザと同時代人たちとの関係については、Gebhardt; *Spinoza*, 1914, (in *Philos. Bibliothek*), Rivaud, *op. cit.* p.p. 264-273, p. 327, フォイエルバッハ、前掲訳書、83 節、デボーリン、前掲訳書、第三章、五一頁以下と、五七頁以下、ゲーッハルト、前掲訳書、第四章および第三章。
- (4) Delbos, *op. cit.* p. 194. Pléiade 版 *Oeuvres complètes de Sp.* p.p. 201-2, Rivaud, *op. cit.* p. 269.
- (5) *Ethica*, I, Prop. 15, Scholium.
ibid., V, Praef. じつは主として松果腺 (*glands pinealis*) の仮説への批判が中心となっているが、同時に動物精気 (*esprits animaux*) という物質的原理とそれに作用する精神的原理としての意志の働きとの関係に集中的に現れているデカルト二元論の困難への鋭い指摘が述べられており、また、その解決を自由意志の否定という方向に求めようという彼の志向が明瞭に述べられている。Wolfson; *op. cit.*, II, p. 116. cf.
- (6) *Ethica*, III, Praef., および Prop. I, II, III. この序言においてはスピノザのデカルトへの好意はかなり明らかである。しかし『定理 III』の『証明』などと併せ読むとき、デカルトがコギトで確立した、なによりもまず意識としての精神と、スピノザの『身体の觀念』としての精神との異質性は一見して明瞭であり、スピノザにおいてはデカルト流の主観的意識は『觀念の觀念』(*idea ideae*) として、いわば随伴現象論的に扱われていることがわかる。従って『情念論』の冒頭以来のデカルトの『能動—受動』の考え方も、スピノザでは全く違った形で説明されることになる。この差異を一言でいえばデカルトの主観主義に対する、スピノザの客観主義である。cf. Rivaud; *op. cit.* p.p. 286. Wolfson; *op. cit.*, II, p. 187.
- (7) *Epist.* II. なお、ここでのスピノザのデカルトへの批判は、結局、意志と悟性の関係に、なかならず意志のとらえ方に向けられているわけで、『短論文』第二部、十六章にも見られるように、スピノザがその思索の出発点以来、一貫してデカルトの意志論に不満を持っていたことがよくわかる。そしてこの不満のより具体的な現れその、スコラの論議の底にある本質的に独創的な思索が、『エチカ』第三部、第五部の批判なのであった。従って、デカルトからスピノザへの展開は、『情念論』と『エチカ』との比較によって、はじめ

て本質的なすじ道が明らかになると考える。(後述参照)。

- (8) リヴオーもいうように、スピノザ解釈は、マルクス主義からのものをも含めて、今日なお流動的だと見るのが適切である。Rivaud; op. cit., p. 372.

- (9) 拙稿、前掲、北大文学部紀要参照。

- (10) 『サンス』誌、前掲特輯号、野田論文、参照。

- (11) この側面を、単に、非合理主義的のみとらえたところに、ラポルト以後の解釈の欠陥が存在した。合理論者デカルトがそこでは全く見失われてしまうわけである。しかし、また、これに対して、機械論者デカルトを強調することはもはやあまり意味がない。むしろ、デカルトにおいて『自由意志』が果た役割を、それが単なる悟性的形而上学に止ることを許さない、理性的なものの否定的現れとして、未完の弁証法としてとらえなおすことによってのみ、デカルトの合理主義を、新たに確認しなおすことができると考える。前掲拙稿参照。

- (12) デカルト説の中心にその『意志乃至自由意志』についてのデカルトの観念を据えることを、ラポルト、カッシーラーらのように承認するとすれば、その観念の起源をどこに求むべきかが新たな問題となってくる。この点については、デカルトがまず手に入れた自由が『懷疑することの自由』だったということが重要な意味を持ってくるだろう。このことは、伝統的スコラ的表現でいえば、不決定の自由 (indifferentia) の観念が、デカルトではより重要だということを意味することになり、スピノザの自由論はいわばデカルトのこの自由の観念の克服と合理化だったということになる。

- Laporte; La liberté selon D. Revue philosophique 1936, Cassirer; Descartes. Alquié; op. cit. せよ前掲拙稿、Discours, Ie. Partie などをも参照。

- (13) ここにデカルトとホッブス、ガッサンデイとの論争の起源があった。第三、第五答弁及び反駁参照。しかし『ゴギト』をめぐるこの論争を通じて、むしろ単に主観主義的把握にとどまらない、思惟一般の客観性への洞察が明らかとなって来ているのであって、この点に、ホッブス、ガッサンデイに対するデカルトの優越性が見出される。

- (14) このような考え方の起源は、Ch. Adam; Descartes, ses trois notions fondamentales. (Adam-Tennery 版全集所収) や、アムラン (Le système de Descartes) などにあるが、フッサールのゴギト解釈 (Méditations cartésiennes) も有力な源泉となっているといえよう。もちろん、フッサールはゴギトのうちに単なる主観的意識の確立のみを見ているわけではないが、認識論的性格をそこに見ていることにはかわりはないといえる。

- (15) このような解釈の典型は、Bergson; L'évolution créatrice, chap. III. のうちに見出される。リヴオーの見解も、ベルグソンほど明白にネガティヴではないが、スピノザ説の諸困難の起源の一つをスピノザの客観主義的態度のうちに求めている。

- (16) L. Brunschwig; Sp. et ses contemporains. p. 169, 307 etc. および、桂、前掲書、第一章の二、二〇頁以下をも参照。ブランシ

ユヴィックや新カント学派の人々のように、スピノザ体系を『幾何学的汎神論』と見ることには反対するのが、今日のスピノザ解釈の主流をなし、桂氏もまたほぼ同じ見解をとっているが、同氏の前掲論文（哲学雑誌、一九五四年）においては、スピノザとデカルトに、その表面上のいちじるしい差異にも拘らず、共通の根底となっている一種の主体主義を認めているように思われる。そして、近世の主体主義——ヘーゲルに代表される——に対する克服の試みというネガティヴな見地にもとづいてではあるが、スピノザのうちにヘーゲルの、フィヒテ的な考え方の存在を承認している。

(17) Hegel, *Enzyklopädie*, §.§. 40-60 に見られるようなカント理解はその一例である。

(18) Marx; Heilige Familie, Dietz 版, s. 220 etc. および広島訳、レーニン『哲学ノート』三〇一頁など。

51) Hegel: *Phänomenologie des Geistes*, Vorrede ㊦㊧㊨ Enzyklopädie § 50, 76, 6, および「本質論における『実体性』」の扱え方など。Die Wissenschaft der Logik, 2er Teil, s. s. 164~9, 185~8.

(20) フォイエルバッハ、『近世哲学史』、前掲訳書、下巻二〇九頁の注（一八四七年附記されたもの）参照。

エンゲルス、『反デューリング論』、国民文庫版、第一冊五六頁。ここでエンゲルスはスピノザの *causa sui* としての『実体』のうち
に、ヘーゲルの『Totalität』相互連関の見地に近いものを見ているのである。エンゲルス、『自然弁証法』、国民文庫版、第一冊、序論、
およびデボーリン、前掲訳書六〇頁をも参照。ここでも、エンゲルスは、スピノザが、当時の自然科学の機械論的制約をこえて、自
然の弁証法的把握に迫ろうとしている点を評価しているように思われる。スピノザにおける弁証法的な側面としては、この『実体』
の性格と、スピノザにおける自由の觀念（必然性の洞察としての、合理化され、客観化された自由の觀念）を挙げるのが、常識的で
あり、かつ正当だと思われる。ソヴァエト・アカデミー版『世界哲学史』第二巻四五四〜五頁参照。R. Garaudy; *La liberté*, 1955,
p.p. 109. をも参照。

(22) デカルト哲学とスピノザ哲学との本質的連関をここに見るならば、スピノザが伝統的存在論乃至そのヘーレポールの修正の枠のうちで展開した、意志と悟性との関係についてのデカルトへの批判的論議と、その問題の究極的、形而上学的解決としての『実体』の説とは、この本質的連関と展開の伝統的用語法による表現と見ることが出来る。そして、スピノザの『実体』の思想のうちにある、汎神論的な、また、客観主義的であつ、内在論的、力動的な性格は、この本質的連関と結びつけられるときにのみ非合理的、神秘的、観念論的理解を拒まれることになるだろう。

(23) 意志に対するスピノザの見解、および、デカルトのそれへの批判などについては、スピノザのテクストはかなり豊富な証言を提供している。以下に列举するは、Ethice, III. Prop. 9, Schol. 1. Prop. 17, Schol. 1. Prop. 33, Schol. 2, Appendix. Cogitata metaph. II, VIII, Tractatus theol. polit. I, IV, V. Epistola, LV, LVI. (Hugo Boxel の『權威とスピノザの政事』) Korte Verhandelng, II, XVII, Cogitata metaph. II, XII, すべて註釋と裏表の關係をいっている。Eh. II, Prop. 49, et Schol., Cogitata metaph., II, VIII. 聖書の註釋と關係をいっている。Eh. II, Prop. 48, 49, Korte Verhandelng, I, VI, Cogitata metaph., II, XII, metaph., II, VIII. 聖書の註釋と關係をいっている。Eh. II, Prop. 48, 49, Korte Verhandelng, I, VI, Cogitata metaph., II, XII, metaph., II, VIII.

Tractatus Politicus, II, 7. Epist. LV, LVI, Eth. V. Praef.

誤謬論との関連では Principia Philos. Cartesianae I, Prop. 15. Schol., Epist. II. (Oldenburg 宛、前出) など。

- (24) デボーリン、前掲訳書『Kline; Sp. in Soviet Philos. 所収、前掲 Akserlod; art. cit. p.p. 61.、『神聖家族』におけるマルクスの解釈、および、『フォイエルバッハ』の前掲訳書における見解、また『Garaudy; op. cit. の見解』、ンウイェット・マカデミー版『世界哲学史』第二巻に見られる見解、また『Garaudy; Perspectives de l'homme, 1961, Chap. III, p. 321.』に紹介されている『J. Desanti; Introduction à l'histoire de la philos., 1956. の見解』、および『H. Selsam; Philos. in Revolution, 1957, Chap. III, に見られるスピノザの位置づけ』、前註②に述べたような理解においては不十分であり、スピノザのうちに主として機械的唯物論を見ることで満足して、そこにおける弁証法的なもの萌芽を、統一的に、かつスピノザ説の中心に位置づけて考察していないように思われる。マルクス主義者以外でスピノザと現代唯物論との関連に触れている『H. Köhler; Gründe des dialektischen Materialismus im europäische Denken, 1961. Ies Kap. IV, s.s. 28. IIes Kap, s.s. 58. IIIes Kap, II. s.s. 95. など』、でも同様の不充分さは覆いがたい。

- (25) フォイエルバッハが、その『ヘーゲル哲学批判』において行なったのはこのような操作に他ならなかった。拙稿、北大、『人文科学論集』第1号所収参照。

- (26) フォイエルバッハ、前掲訳書下巻、99節の『一八三三年の批判的結語』におけるスピノザ観と、同、100節、『一八四七年の批判的結語』のそれとを比較せよ。

- (27) デボーリンのこの見解に対する批判としては、前出の Kline; op. cit. 所収『Luppol の論文参照』。

- (28) 広島訳、レーニン、『哲学ノート』、六四頁など参照。

- (29) Garaudy; Perspectives de l'homme, Chap. III. に紹介されている J. Desanti の、前出註②で触れておいた未完の論文は、セーヴラのマルクス主義者にそのオリジナリティを賞せられた研究であって、ガローディの紹介からもその点はいうかがいえるように思われる。そこには、今ここで述べて来たような側面についての論議も若干見られるが、主として、哲学史の方法論が論議の対象となっていて、スピノザ説もその方法の適用の一対象にすぎないように見うけられる。当時の社会的諸条件とスピノザ説との関係という点では興味ある見解が述べられているようだが、原著を今日までに入手しえなかったため、その見解の紹介と吟味も後日に譲らざるをえない。

〔附記〕主として紙数の関係と健康上の理由などから来る制約のために、本来、マルクス主義哲学の立場での、スピノザの自由論のデカルトからの展開と、今日のスピノザ解釈の主流をなしている傾向への批判の試みとしての小論の、いわば、序論と結論の一部分のみがここに掲載されることになったので、この中には、後日書きつがるべき、註Ⅲの③に挙げておいたようなテキストを中心とする分析と、『Conatus』に関する考察などによってのみ立証されるような推論が、予め不十分な論拠にもとづいて先取的に述べられているような部分が見出されるかもしれないが、それは、このような形式をえらんだ筆者の責任である。(一九六五、一、二四)